

# 接頭・接尾辞と漢字二字熟語との 結合力に関する日韓対照研究

宮岡弥生・玉岡賀津雄・林炫情\*

## < 요 지 >

### 접두·접미사와 2자 한자 숙어의 결합력에 관한 일한 대조연구

일한 양언어의 접사는, 단독으로는 語를 형성하지 못하며, 여러 가지 語基에 첨가되어 사용된다. 그 때문에 「語基+ 접사」 형의 어휘로서 이미 널리 알려진 것 이외에도 접사가 새롭게 첨가된 가능성이 있는 語基는 한국어 일본어에서 적지 않을 것으로 여겨진다. 따라서 본 연구에서는 모어 화자는 語基와 접사를 결합시키는 법칙을 언어감각으로서 지니고 있다는 인식하에, 한일 양언어의 모어 화자를 대상으로 1자 한자 접사와 2자 한자 語基의 결합력에 관한 설문지 조사를 하였다. 본 연구에서 취급한 접사는, 접두사가 「再(재) 新(신) 全(전) 大(대) 初(초) 超(초) 反(반) 非(비) 不(불) 每(매) 未(미) 無(무)」 12개, 접미사가 「学(학) 論(논) 用(용) 風(풍) 的(적) 性(성) 狀(장) 者(자) 式(식) 化(화) 家(가) 界(계)」 12개로 전부 24개이다. 접사 선택에는 일한 양언어의 접사전체의 사용 실태를 파악하기 위해, 첫째로 접사의 성격이 치우쳐 있지 않을 것, 둘째로 사용빈도가 높은 것에서부터 낮은 것까지 종류가 다양할 것, 셋째로 일본어에도 한국어에도 있는 접사일 것에 중점을 두었다. 분석결과, 일본어와 한국어의 접사 첨가 패턴은 부분적으로는 다르지만 전체적으로는 매우 비슷한 경향을 보이고 있다는 것을 알 수 있었다. 따라서 일본어와 한국어의 접사를 외국어로서 학습할 경우에는 모어의 지식을 어느 정도 응용할 수 있을 것으로 여겨진다. 한편, 語基 별로 보면 양자의 결합 패턴이 다르게 나타났는데, 이것은 접두사의 사용법이 일본어와 한국어에서 서로 다른 점에 기인한다고 생각된다. 그러므로 한국어 모어 화자가 일본어의 접사를 학습할 때는 양언어간의 접사 첨가 패턴이 다른 접사를 중심으로 학습한다면 더욱 효과적으로 접사를 습득할 수 있다고 본다.

主題語：接頭辞、接尾辞、日本語、韓国語、漢字二字熟語

## 1. 目的

「語」を「文を構成する最小の單位で、さらにちいさな單位から構成されることもある」(野村,1977)と定義した場合、語を構成する要素のうち、語の意味的な中核となるもので、単独で語を構成することもできるものは「語基」と呼ばれる。これに対して、語基と結合して形式的な意味を添

\* 広島経済大学 助教授, 日本語教育, 広島大学留学生センター 教授, 言語心理学, 広島修道大学 助教授, 対照日語学

えたり、語の品詞性(文法的性格)を決定したりするが、単独では語を構成することができないものが「接辞」である(野村,1977;田中,1988など)。例えば、「しなやかさ」という語を構成する要素のうち、「しなやかだ」という意味の中核をなす「しなやか」は「語基」に分類される。一方、単独で文中にあらわれることはなく、名詞という品詞性を決定づける「さ」は「接辞」である。

日本語の接辞には、「しなやかさ」の「さ」や、「か弱い」の「か」のように和語に由来するものと、「近代的」の「的」や「未成年」の「未」のように漢字漢語に由来するものがある。和語系の接辞と漢字漢語系の接辞とを比べると、漢字漢語系のほうが数が多いことは、現代日本語における接辞の特徴の一つである。また、全体的に見て、接頭辞よりも接尾辞のほうがはるかに種類が多く用例も豊富であることも、特徴の一つである(森田・村木・相沢, 1989)。

現代日本語の接辞の多くを占めている漢字漢語由来の接辞に焦点を絞ると、これらは「新人類」の「新」のような形容詞性接頭辞や、「非常識」の「非」のような否定接頭辞、また、「近代的」の「的」のような形容動詞性接尾辞などに分類される(玉村,1985)。漢字漢語由来の接辞について、新聞紙上に出現した使用頻度を算出した調査によると、結合する語基の数が多いもの、つまり結合力が強いものは、接頭辞では「大」「新」「各」「全」「不」、接尾辞では「的」「者」「性」「化」「用」などであった(野村, 1978)。

このように、日本語では漢字一文字で表される接辞は、韓国語にも漢字由来の接辞として同様に存在する。そして、両者の語構成上の形式は非常に類似している。例えば、日本語の語基「必要」に接尾辞「性」を添加した「必要性」は、韓国語では「필요(必要)」に「성(性)」を添加した「필요성(必要性)」となる。また、「학문(学問)」に「적(的)」を添加すると「학문적(学問的)」となる。「학기(学期)」の前に「신(新)」を添加すると「신학기(新学期)」となる。

日韓両言語に見られる接辞は、単独では語を形成せず、さまざまな語基に添加して用いられる。そのため、「語基+接辞」の形としての語彙としてすでに広く知られているもののほかにも、接辞が新たに添加する可能性のある語基は少なくないであろう。そして、新しい派生語を生み出すのはことばを発する人間自身であるとするならば、語基と接辞を結びつける法則は、それぞれの母語話者が持っている言語感覚にあると考えられる。そこで本研究では、接辞を漢字一文字、語基を漢字二字熟語として、接辞と語基との結合力について、日韓両言語の母語話者に質問紙で尋ねて比較した。

## 2. 研究方法

日韓両言語に共通の語基に添加する接辞として、接頭辞の「再(재)・新(신)・全(전)・大(대)・初(초)・超(초)・反(반)・非(비)・不(불)・毎(매)・未(말)・無(무)」の12個と、接尾辞の「学(학)・論(논)・用(용)・風(풍)・的(적)・性(성)・状(장)・者(자)・式(식)・化(화)・家(가)・界(계)」の12個の、計24個を選択した(以下、韓国語省略)。その際、日韓両言語の接

辞全体の使用実態が把握できるようにするため、第1に、接辞の性格が偏っていないさまざまな種類のもの、第2に使用頻度が高いものから低いものまでさまざまなもの、そして第3に日韓両言語に共通のものを選択した。

次に、日本語と韓国語のそれぞれについて、外国語として学習する場合に基本語彙となると考えられる単語を選定した。日本語は、「音声教育基本語彙データベース」(助川,1994)に収められた語彙のうち、重要度得点が最高の40から32までの漢字二字熟語246個を選んだ。この重要度得点とは、国立国語研究所が「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得る」ことを目的として行った日本語の基本語彙調査(国立国語研究所,1984)に基づいている。一方、韓国語は、韓国国立国語研究院が2003年5月にまとめた韓国語学習用語彙目録(<http://www.korean.go.kr/nkview/dw02.htm>)に収録されている語彙の中から、重要度が最も高い1段階のうちの漢字二字熟語の名詞164個を選定した。このように日韓両言語で同様の基準に基づいて選定した語彙のうち、同一の語形と意味を持つ漢字二字熟語を抽出したところ、54語が最終的に残った。

この54語の漢字二字熟語に、接頭辞の「再(재)・新(신)・全(전)・大(대)・初(초)・超(초)・反(반)・非(비)・不(불)・毎(매)・未(말)・無(무)」と接尾辞の「学(학)・論(논)・用(용)・風(풍)・的(적)・性(성)・状(장)・者(자)・式(식)・化(화)・家(가)・界(계)」の計24個の接辞が添加可能かどうかを、それぞれ日本語母語話者と韓国語母語話者に尋ねた。韓国語の質問紙には、ハングルとともに漢字も併記した。これは、同音異義語による誤認を避けるためである。被験者である日韓両言語の母語話者には、0点から3点までの4段階で判定してもらった。判定の基準は次の通りである。日常生活において見聞きしたことがまったくなく、日本語・韓国語の語彙として明らかに存在しないと思うものは0点、日常生活において見聞きしたことがあるかどうか定かではないが、日本語・韓国語の語彙となりうる可能性があると思うものは1点、日常生活においてわずかではあるが見聞きしたことがあり、日本語・韓国語の語彙として存在すると思うものは2点、日常生活において頻繁に見聞きし、明らかに日本語・韓国語の語彙として存在すると思うものは3点、である。判定者は日本語母語話者と韓国語母語話者が各5名で、全員、言語感覚の鋭敏な30歳代の大学教員もしくは20歳代後半の大学院生である。

### 3. 分析と考察

#### 3.1 結合度の平均からの分析

接辞と語基の組み合わせに対する、日本語母語話者と韓国語母語話者の判定者各5名の得点の合計点を、接辞の結合度とした。従って、結合度は、最高点が15点(3点×5人)で、最低点が0点までの変数である。

接辞24個と漢字二字熟語の54語との組み合わせは、1,296通りである。結合度が最高点の15点であったもの、つまり、語基と接辞の結びつきが非常に強いものは日本語は「大会社」「大家族」「再試験」「新住所」「新生活」「再来年」「不健康」「学生用」「健康的」「旅行者」「旅行用」「歴史学」の、全部で12通りのみであった。韓国語はさらに少なく、「全学生(전학생)」「全学校(전학교)」「재시험(再試験)」「대가족(大家族)」「가족적(家族的)」「역사학(歴史学)」「歴史論(역사론)」「학생용(学生用)」の8通りであった。これらのうち、日韓両言語でともに結合度が最高点だったのは、「大家族(대가족)」「再試験(재시험)」「学生用(학생용)」「歴史学(역사학)」の4つであった。以上のように、結合度が最高点だったもののうち日本語では3分の1が、韓国語では半数という高い割合の語彙が、日韓両言語で全く同じ語彙であった。

さらに、日韓両言語の全体の結合度についてピアソンの相関係数をみると、両者の相関は非常に高く( $n=24$ ,  $r=.856$ ,  $p<.01$ )、全体的に見た場合、接辞の結合パターンは両言語でかなり類似していることが明らかになった。より詳細に検討するために、表1に示すように、54語について各接辞のピアソンの相関係数を算出した。その結果、24個の接辞のうち5個を除いて、19個が $r=.50$ 以上の相関係数を示し、これらは0.1%レベルの有意であった。最も相関係数が高かったのは、接尾辞の「学」で $r=.859$ であり、両言語でかなり類似した漢字二字熟語に対して同じくらいの結合度で使われていることが分かる。第2が、接頭辞の「毎」で $r=.781$ で、第3が、「用」で $r=.737$ であった。

表1 日本語と韓国語の接頭および接尾辞24個の結合度、 $t$ 値および相関係数

接頭辞	結合度		$t$ 値	sig.	相関係数	sig.	接尾辞	結合度		$t$ 値	sig.	相関係数	sig.
	日本語	韓国語						日本語	韓国語				
全	6.94	5.31	2.13 *		.641 ***		用	7.69	8.39	-0.92		.737 ***	
新	5.00	3.72	1.70		.699 ***		論	3.39	3.26	0.20		.698 ***	
大	4.61	2.74	2.45 *		.718 ***		学	3.02	3.41	-0.52		.859 ***	
初	2.30	0.09	4.80 ***		.125		風	2.91	2.78	0.25		.700 ***	
再	1.98	1.76	0.32		.721 ***		的	2.74	2.83	-0.13		.586 ***	
毎	1.96	0.98	2.00 *		.781 ***		化	2.24	4.81	-4.33 ***		.581 ***	
無	1.87	0.61	3.00 **		.730 ***		性	1.70	2.33	-1.07		.719 ***	
未	0.87	0.17	2.89 **		.114		者	1.56	0.65	2.08 *		.515 ***	
非	0.76	0.57	0.79		.147		界	1.19	1.74	-1.08		.689 ***	
不	0.67	0.04	2.11 *		-.061		家	1.07	2.07	-1.56		.765 ***	
超	0.48	0.11	1.90		.635 ***		式	1.04	2.28	-2.89 **		.514 ***	
反	0.41	0.41	0.00		.590 ***		状	0.59	0.26	1.72		.077	
M	2.32	1.38					M	2.43	2.90				
SD	2.01	1.63					SD	1.81	2.02				

注: 各接辞と単語54個の結合度は、日本語と韓国語の母語話者各5人の評定値の合計の平均によって算出した。

最高点は15点(3点×5人)である。

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$ .

さらに、各接辞の結合度の平均を日韓別に示した。しかし、各接辞について日韓共通の54語の結合度で違いを検討する(独立したサンプルの  $t$  検定)と、24個の接辞のうち接頭辞7個、接尾辞3個の計10個の接辞で有意な違いがみられた。このことは、24個の接辞の結合度のパターンは日韓

で類似しているが、その結合度そのものは半数弱で違いがあることを示している。さらに接頭辞と接尾辞とで比較すると、接頭辞よりも接尾辞のほうが、日韓の類似度が高いと言えるであろう。24個の接辞の中で、特に日韓で大きな違いが見られたのは、接頭辞の「初」 $[t(1)=4.80, p<.001]$ と接尾辞の「化」 $[t(1)=-4.33, p<.001]$ であった。特に、「初」に関しては、54種類の漢字二字熟語との結合度の相関係数も $r=.125$ と低いので、結合のパターンおよび結合度において、日韓両言語でかなり異なっていると言えるであろう。韓国語の結合度が0.09であることから推測して、韓国語では、「初」は接頭辞としてあまり使われなれないと思われる。日本語では、「初」の結合度が2.30であるため、韓国語に比べると使用頻度が高いことが分かる。

### 3. 2 24個の接辞についての分析

次に、接辞の位置によって結合パターンが異なるかどうかを検証するために、2(日本語と韓国語) $\times$ 2(接頭辞と接尾辞)の分散分析を行った。前者が被験者間分析で、後者が反復のある被験者内分析である。これらの平均と標準偏差は、図1に示した通りである。分析の結果、まず、日本語と韓国語という言語の違いに有意な主効果はなかった $[F(1,22)=2.031, p<.168, n.s.]$ 。また、語頭と語尾という接辞添加の位置の違いについても有意な主効果はみられなかった $[F(1,22)=1.088, p<.308, n.s.]$ 。しかし、両変数の交互作用が有意であった $[F(1,22)=18.436, p<.001]$ 。この結果は、接辞の結合パターンを全体としてみた場合には言語および接辞添加の位置による違いはないが、図1の棒グラフからも分かるように、両言語においてパターンが異なっていることを示している。これを平均から考察すると、日本語の接頭辞の結合度(M=2.32,SD=2.10)と接尾辞の結合度(M=2.43,SD=1.89)はかなり類似しているのに対して、韓国語の場合は、接頭辞の結合度(M=1.38,SD=1.70)が低く、それに比べて接尾辞(M=2.90,SD=2.11)の結合度は高い。つまり、日本語では、接頭辞と接尾辞が同じくらいの結合度で漢字二字熟語と結びついているのに対して、韓国語では、接頭辞の結合は弱く、それに対して接尾辞の結合がより強いと言えるであろう。

さらに、日本語と韓国語のそれぞれにおいて接辞の位置による違いがあるかどうかを検証するために、 $t$ 検定を接頭辞・接尾辞で行った。その結果、日本語では接頭辞と接尾辞の間に違いはなかった $[t(22)=0.131, p=.897, n.s.]$ が、韓国語では、有意ではないが接頭辞と接尾辞の間に有意傾向を示した $[t(22)=1.948, p=.064]$ 。このことから分散分析の結果と同じように、韓国語では接辞の位置によって結合度が、わずかながら異なる傾向があることがわかった。

また、韓国語の接辞の結合度をX軸に、日本語の接辞の結合度をY軸にとって24個の接辞を図2にプロットした。さらに、日韓両言語の平均結合度をクラスタ分析し、これら24個の接辞を分類した。クラスタ間の距離にはウォード法を用い、短縮語間の距離は平方ユークリッド距離によって測定した。その結果は図2のプロット図に追加して表した。濃い線は、クラスタ間の距離が最高である25を示した分類である。

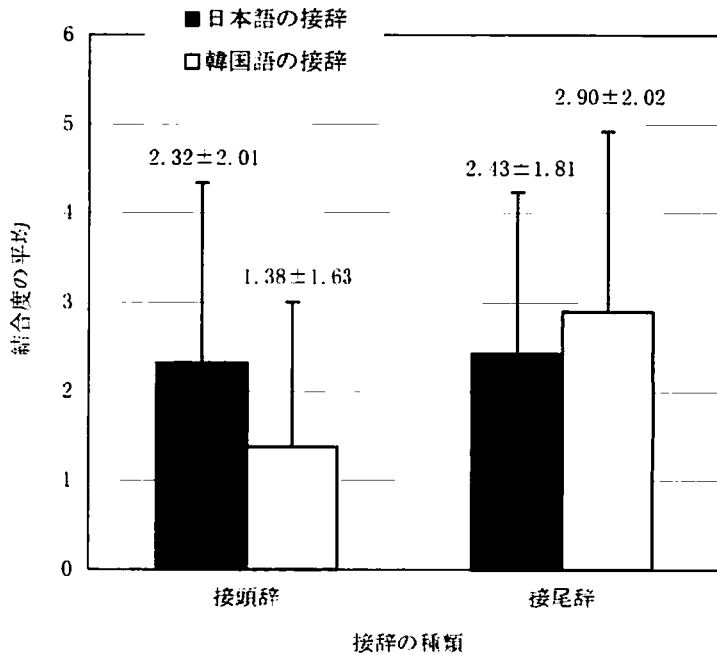


図1 日本語と韓国語の接辞の結合度の平均と標準偏差

注1: 棒グラフ上の線は標準偏差を示す。

注2: ±の前の数値は平均、後の数値は標準偏差を示す。

分析の結果、図2に示したように、分類Ⅰと分類Ⅱという大きな2つの分類ができた。分類Ⅰは、さらに下位分類1と下位分類2に分かれる。下位分類1は、接頭辞の「全」と接尾辞の「用」であるが、これらはいずれも日韓ともに語基との結合力の強い接辞であることが分かる。下位分類2は、「新」「大」「論」「学」「風」「的」「化」の7個であった。これらは、「全」と「用」に比べると結合力はかなり低くなるものの、両言語ともに結合力がほぼ3から5の範囲である。学問に関する接尾辞である「論」と「学」、状態を形容する表現である「風」と「的」は、それぞれ近い位置にあり、接辞の結合パターンが似ていることがわかる。分類Ⅱは結合力が日韓ともに低いグループである。下位分類1は、「初」「無」「毎」「者」「未」「不」「反」「非」「超」「状」の10個、下位分類2は、「再」「性」「界」「家」「式」の5個であった。これらのうち、回数を表す「初」「無」「毎」、否定の意味を表す「未」「不」「反」「非」は、それぞれ近い位置にある。このことから、同種の意味をもつ接辞は、語基との結合パターンも似る傾向があると言えるであろう。

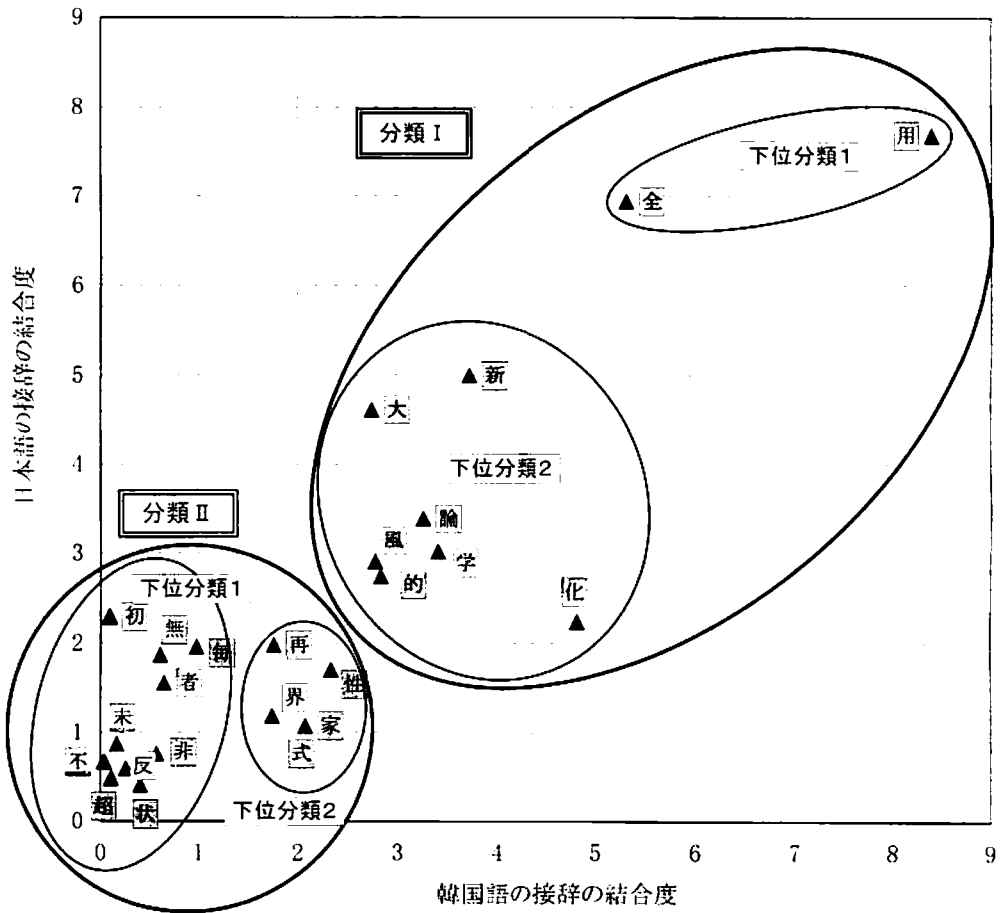


図2 日本語と韓国語の接辞24個の結合度

### 3. 3 54個の語基についての分析

54個の語基について、接辞との結合度を分析した。日本語と韓国語の語基54個の結合力の平均は、表2に示した。接頭辞と接尾辞を合わせた接辞として見た場合、日本語で語基との結合度が高かったものの上位5つは、上から順番に「試験」(M=4.75)、「映画」(M=4.38)、「動物」(M=4.33)、「歴史」(M=4.21)および「運動」(M=4.08)であった。一方、韓国語は、「歴史」(M=4.88)、「家族」(M=4.54)、「音楽」(M=4.50)、「映画」(M=4.42)および「運動」(M=4.21)が結合度の上位5つであった。これら5つのうち、「運動」「歴史」「映画」の3つという半数以上の語基が日韓で一致していたことは、両言語において、接辞と漢字二字熟語の

結合の仕方がかなり類似していることを示唆している。

これらを接頭辞と接尾辞とで別に見ると、日本語の「試験」は接頭辞の平均結合度が6.42であるのに対して接尾辞は3.08と、両者の間に大きな開きがあった。同様に、「映画」は接頭辞が2.83で接尾辞が5.92、「動物」は接頭辞が2.25で接尾辞が6.42となっており、結合度がどちらかに偏っていた。韓国でも、「歴史」の接頭辞が2.83であるのに対して接尾辞は6.92、「家族」の接頭辞が3.08で接尾辞が6.00と、やはり接頭辞と接尾辞とで異なっていた。しかし、中には両者が近い値を示しているものもある。

そこで、語基となる単語によって接辞添加のパターンが異なるかどうかを検証するために、2(日本語と韓国語)×2(接頭辞と接尾辞)の分散分析を行った(結合度の平均は24種類の接頭辞と接尾辞の場合と同じであるが、54種類の語基である漢字二字熟語をもとにした分析であるため、標準偏差および自由度が異なってくる)。前者が被験者間分析で、後者が反復のある被験者内分析である。分析の結果、日本語と韓国語という言葉の違い[ $F(1,53)=4.652, p<.05$ ]、および語頭と語尾という位置の違い[ $F(1,53)=16.971, p<.001$ ]のどちらにも有意な主効果がみられた。両変数の交互作用も有意であった[ $F(1,53)=78.016, p<.001$ ]。つまり、54個の語基一つ一つと接辞との結合パターンは日本語と韓国語で異なり、また接頭辞と接尾辞とでも異なっていることを意味している。

さらに、韓国語の漢字二字熟語54個の結合度をX軸に、日本語の漢字二字熟語54個の結合度をY軸にとって、54個の漢字二字熟語を図3にプロットした。また、日韓両言語の平均結合度をクラスタ分析で、これら54個の漢字二字熟語を分類した。クラスタ間の距離にはウォード法を用い、短縮語間の距離は平方ユークリット距離によって測定した。その結果は図3のプロット図に追加して表した。濃い線は、クラスタ間の距離が最高である25を示した分類である。

図3のように、54個の語基は、それぞれ下位分類1と下位分類2をもつ分類Iと分類IIに分かれた。この図から、結合度が低いほど日韓の差が小さいことがわかる。4つのグループの中で最も日韓の差が大きいのは、分類Iの下位分類2であった。下位分類2に属する語基20個を、日本語のほうが結合度が高いものと、韓国語のほうが結合度が高いものとに分けると、韓国語のほうが結合度が高かったのは、「会社」「銀行」「新聞」「学生」「学校」「会議」「外国」「地図」「公園」「時間」「食堂」の11個、日本語のほうが高かったのは、「病院」「料理」「写真」「説明」「授業」「練習」「旅行」「健康」「雑誌」の9個であった。両者を比べると、韓国語の結合度のほうが高かったグループは、「会社」「銀行」「学校」「公園」「食堂」といった具体的な一種の建造物が多いことがわかる。これに対して、日本語の結合度のほうが高かったグループは、「料理」「説明」「授業」「練習」「旅行」「健康」と、どちらかといえば抽象的な意味合いの強い語が多い。これは、場所を表す名詞につく接辞の付き方が、日本語と韓国語で異なっているからであるとも考えられるであろう。

さらに、図3を見ると、結合度が高い語基が必ずしも使用頻度が高いとは限らないように思われる。そこで、次に、語基の使用頻度を変数に入れて分析を行うことにした。



54種類の漢字二字熟語の使用頻度と結合度のピアソンの相関係数を算出した。その結果、相関係数は $r=.29$ で決して高いとは言えない数値であったが、この値は有意であった。

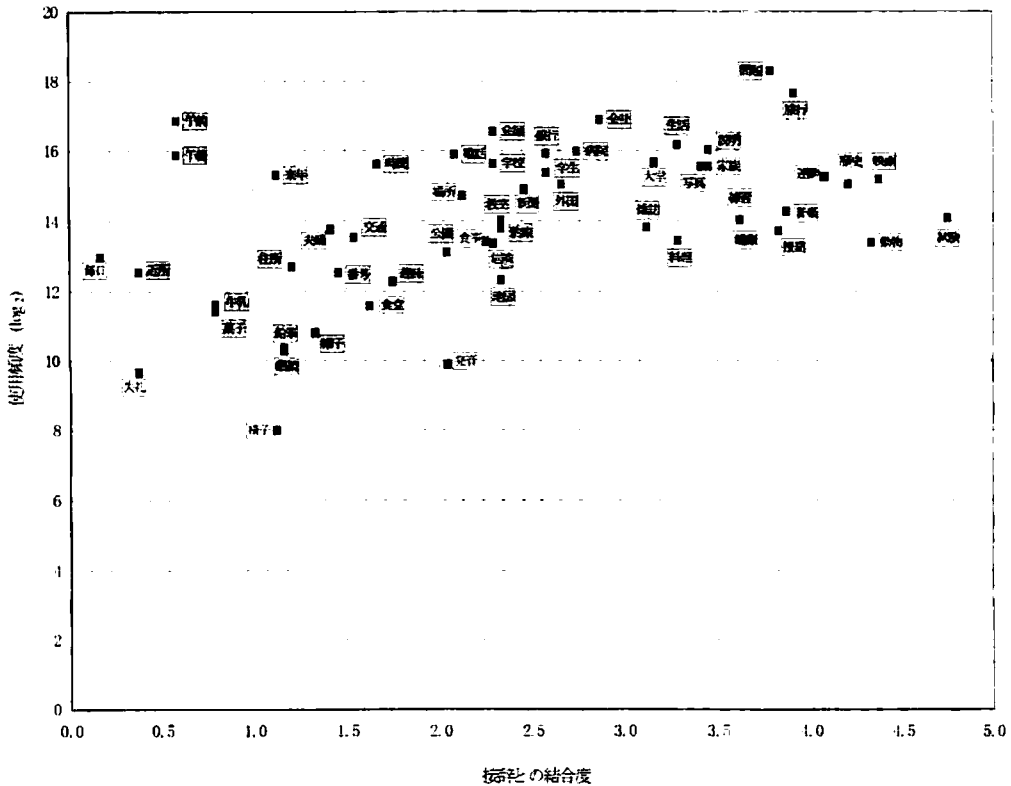


図4 日本語の語基と接辞との結合度と使用頻度のプロット

次に、語基の漢字二字熟語と結合度をプロットして、視覚的に分布を考察することにした。その際、使用頻度の数値が大きいため、対数の底を2とする $\log_2$ の値を使った。プロットの結果は図4に示した通りである。使用頻度が比較的類似しているのに対して、各語基の結合度は広く分布していることが分かる。そのため、この分布からみると、上述の相関係数が示すように、使用頻度と結合度との関係は決して強くないことが分かる。使用頻度の最も高いのが、「問題」で320,522回であるが、日本語での結合度は、3.79である。一方、最も低いのは「椅子」で257回に過ぎず、結合度も低く1.13である。しかし、同様に使用頻度が957回と低い「発音」は、結合度が2.04で多少高くなっており、相関係数が決して高くないことが個別にみても分かる。このように、語基の使用頻度とそれらの接辞との結合度は、きわめて緩やかな関係であると言えよう。

## 4. おわりに

以上のように、日本語と韓国語の接辞添加のパターンは、部分的には異なっているものの、全体的には大変類似していることが明らかになった。このことから、日本語と韓国語の接辞を外国語として学習する場合には、漢字語の知識がある程度応用できると考えられる。一方、語基別にみた場合には両者の結合パターンは異なっていたが、これは接頭辞の使われ方が日本語と韓国語で異なっているためであると考えられる。以上のことから、韓国語母語話者が日本語の接辞を学習する際には、両言語で接辞添加パターンが異なっているものに焦点を絞ることで、効率的に接辞を習得できると思われる。

本研究では、接辞と漢字二字熟語の結合パターンについて、日韓両言語での実態を全体的に把握することを目的としたため、接辞の性格の偏りをなくすようにさまざまな特性をもつ接辞を選択した。そのため、それぞれの接辞の性格が接辞と語基の結合力にどのような影響を及ぼすかについては細かく言及することができなかった。また、本研究では、接辞と結合する語基を漢字二字熟語に限定した。これは、日本語の国語辞典に掲載された語彙の約70%が漢字二字熟語である(Yokosawa&Umeda,1988)ことから、より効率的な教育現場への応用を考慮に入れたためである。しかしながら、接辞は漢字二字熟語のみならず、一字漢字にも結合することができる。接辞が一字漢語と結合する場合に、その結合パターンについて、今回調査した漢字二字熟語の場合と同様の結果が得られるかどうかはわからない。これらの点については、今後の課題としたい。

さらに、今回の調査の被験者は、いずれも言語に関する知識が豊富な韓国語母語話者と日本語母語話者各5名の計10名であったが、仮に被験者がこのような性質をもたない人々である場合には、異なった結果となる可能性もある。被験者の数および属性を変えた形で、同様の結果が得られるかどうかについても検証する必要があるだろう。

謝辞: 本論文の執筆にあたっては、査読者の方々から大変貴重なご意見を頂戴いたしました。深くお礼申し上げます。

表2 日本語と韓国語の漢字二字熟語54個の結合度の平均

漢字二字熟語 54個	使用頻度	接辞		接頭辞		接尾辞	
		日本語	韓国語	日本語	韓国語	日本語	韓国語
試験	17,407.00	4.75	3.38	6.42	4.00	3.08	2.75
映画	37,275.00	4.38	4.42	2.83	1.92	5.92	6.92
動物	10,687.00	4.33	3.25	2.25	1.08	6.42	5.42
歴史	33,891.00	4.21	4.88	2.42	2.83	6.00	6.92
運動	39,145.00	4.08	4.21	4.08	2.17	4.08	6.25
旅行	205,593.00	3.92	2.42	3.33	1.00	4.50	3.83
音楽	19,777.00	3.88	4.50	2.58	1.83	5.17	7.17
授業	13,512.00	3.83	2.63	4.92	3.08	2.75	2.17
問題	320,522.00	3.79	3.42	3.75	2.83	3.83	4.00
健康	16,700.00	3.63	1.88	2.50	0.08	4.75	3.67
練習	16,650.00	3.63	2.08	4.92	1.75	2.33	2.42
家族	47,974.00	3.46	4.54	3.17	3.08	3.75	6.00
説明	66,723.00	3.46	2.50	4.25	0.92	2.67	4.08
写真	47,843.00	3.42	2.79	2.67	0.67	4.17	4.92
生活	73,822.00	3.29	3.88	3.17	2.33	3.42	5.42
料理	11,141.00	3.29	2.92	2.92	1.58	3.67	4.25
大学	51,971.00	3.17	3.71	3.00	2.08	3.33	5.33
雑誌	14,515.00	3.13	1.63	3.00	0.67	3.25	2.58
会社	121,162.00	2.88	3.25	3.17	2.17	2.58	4.33
病院	64,660.00	2.75	2.67	2.83	1.67	2.67	3.67
外国	33,746.00	2.67	2.71	1.08	0.58	4.25	4.83
学生	42,414.00	2.58	4.17	2.25	3.67	2.92	4.67
銀行	61,818.00	2.58	3.58	2.33	2.67	2.83	4.50
新聞	30,764.00	2.46	3.42	2.25	1.33	2.67	5.50
危険	14,254.00	2.33	1.50	1.83	0.58	2.83	2.42
地凶	5,152.00	2.33	2.42	2.75	2.08	1.92	2.75
約束	16,582.00	2.33	1.38	3.33	1.42	1.33	1.33
会議	96,306.00	2.29	3.04	3.17	2.75	1.42	3.33
学校	51,047.00	2.29	3.63	2.50	3.25	2.08	4.00
教室	10,533.00	2.29	1.83	3.00	1.50	1.58	2.17
食事	11,003.00	2.25	1.46	2.08	1.25	2.42	1.67
場所	26,951.00	2.13	0.83	2.83	0.67	1.42	1.00
電話	61,270.00	2.08	1.17	2.58	0.67	1.58	1.67
公園	8,855.00	2.04	2.29	2.33	2.42	1.75	2.17
発音	957.00	2.04	0.58	2.17	0.25	1.92	0.92
趣味	4,993.00	1.75	1.42	1.75	0.83	1.75	2.00
時間	50,399.00	1.67	2.46	1.92	2.08	1.42	2.83
食堂	3,081.00	1.63	2.17	1.75	1.75	1.50	2.58
交通	11,927.00	1.54	1.58	1.83	0.50	1.25	2.67
番号	5,952.00	1.46	1.38	1.83	1.75	1.08	1.00
夫婦	13,941.00	1.42	1.75	0.92	0.50	1.92	3.00
帽子	1,795.00	1.33	0.25	1.00	0.17	1.67	0.33
住所	6,703.00	1.21	1.08	2.25	1.58	0.17	0.58
鉛筆	1,259.00	1.17	0.54	1.17	0.50	1.17	0.58
眼鏡	1,314.00	1.17	0.46	1.08	0.25	1.25	0.67
椅子	257.00	1.13	0.96	1.00	0.75	1.25	1.17
来年	40,685.00	1.13	0.42	1.25	0.00	1.00	0.83
菓子	2,748.00	0.79	0.33	0.58	0.33	1.00	0.33
牛乳	3,157.00	0.79	0.63	0.67	0.17	0.92	1.08
午後	60,358.00	0.58	0.38	0.33	0.00	0.83	0.75
午前	119,335.00	0.58	0.67	0.33	0.25	0.83	1.08
近所	6,007.00	0.38	0.00	0.17	0.00	0.58	0.00
失礼	817.00	0.38	0.13	0.75	0.08	0.00	0.17
毎日	8,039.00	0.17	0.00	0.08	0.00	0.25	0.00
M	37,877.57	2.37	2.14	2.32	1.38	2.43	2.90
SD	53,933.03	1.18	1.36	1.26	1.06	1.51	1.98

注:各接辞と漢字二字熟語との結合度は、接辞24個(接頭辞12個と接尾辞12個)の結合度の平均によって算出した。最高点は15点(5点×3人)である。

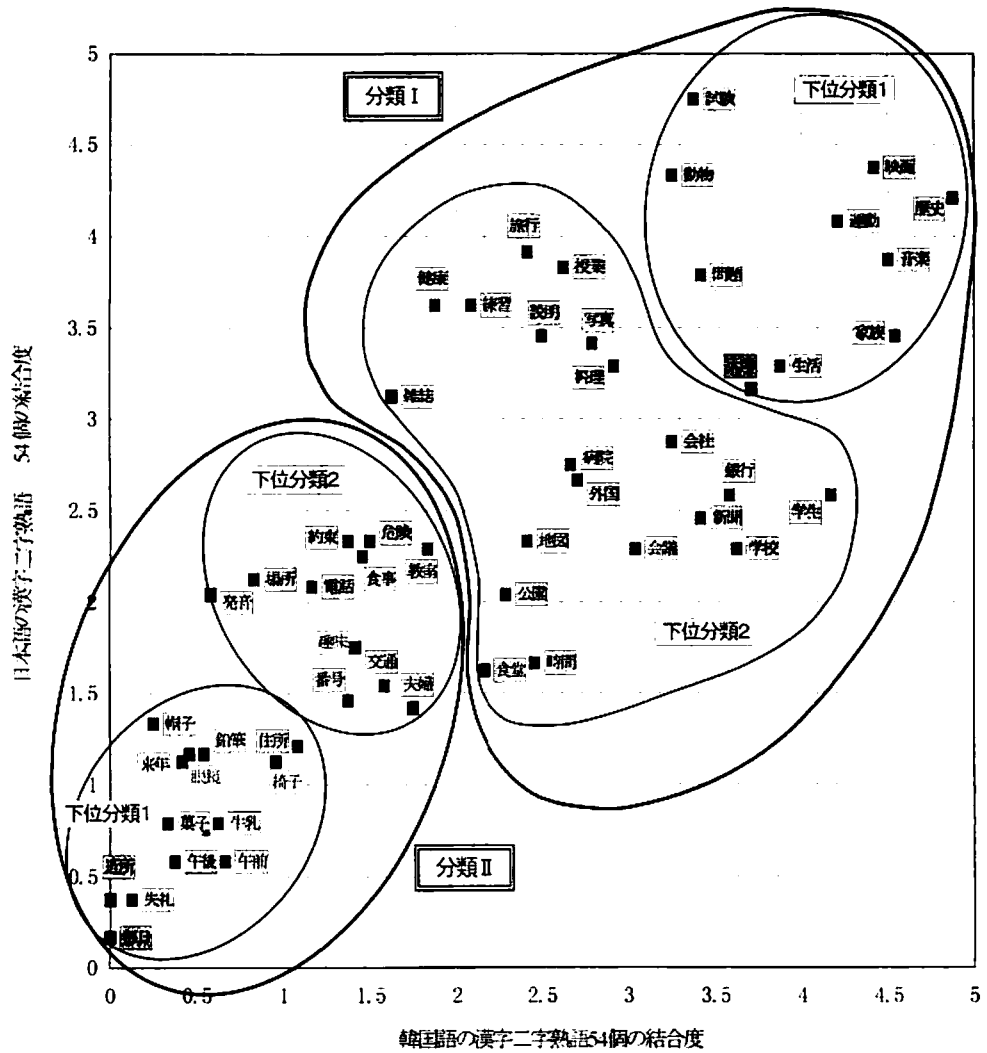


図3 日本語と韓国語の漢字二字熟語54個の結合度

### 3. 4 日本語の語基の使用頻度についての分析

語基の使用頻度と結合度の間にはどのような関係があるかを調べた。まず、語彙使用頻度は、54種類の語基である漢字二字熟語が、1985年から1998年までの14年間の朝日新聞に何回出現したかを示す指標(天野・近藤、2000)である。実際の使用頻度は、表2に示した通りである。まず、

## 【参考文献】

- 天野成昭・近藤公久(2000)「日本語の語彙特性－朝日新聞の語彙文字頻度調査」7,三省堂.
- 韓国国立国語研究院(2003)「韓国語学習用語彙目録」国立国語研究院. (<http://www.korean.go.kr/nkview/dw02.htm>)
- 国立国語研究所(1984)「日本語教育のための基本語彙調査」秀英出版.
- 森田良行・村木新次郎・相沢正夫(1989)「ケーススタディ日本語の語彙」(株)おうふう.
- 野村雅昭(1977)「造語法」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』岩波書店.
- 野村雅昭(1978)「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告61 電子計算機による国語研究IX』秀英出版, 102-138.
- 助川泰彦(1994)「音声教育基本語彙のデータベース化」『東北大学留学生センター紀要』2, 63-70.
- 玉村文郎(1985)「語の構成と造語法」『日本語教育指導参考書12 語彙の研究と教育(下)』国立国語研究所.
- 田中春美編(1988)「現代言語学辞典」成美堂.
- 野村雅昭(1974)「四字漢語の構造」『国立国語研究所報告54, 電子計算機による国語研究VII』秀英出版, 50-52.
- Yokosawa, K. & Umeda, M (1988). Processes in human kanji-word recognition. Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, and cybernetics, 378-380. August 8-12, 1988, Beijing and Shenyang, China.

— < 要 旨 > —

**接頭・接尾辞と漢字二字熟語との結合力に関する日韓対照研究**

日韓両言語に見られる接辞は、単独では語を形成せず、さまざまな語基に添加して用いられる。そのため、「語基+接辞」の形の語彙としてすべに広く知られているもの以外にも、接辞が新たに添加する可能性のある語基は、日韓両言語で少なくないと考えられる。そこで本研究では、母語話者が語基と接辞を結び付ける法則を言語感覚として持っているとの認識のもとに、接辞を漢字一文字、語基を漢字二文字熟語として、接辞と語基との結合力について、日韓両言語の母語話者に質問紙で尋ねて比較した。本研究でとりあげた接辞は、接頭辞が「再・新・全・大・初・超・反・非・不・毎・未・無」の12個、接尾辞が「学・論・用・風・的・性・状・者・式・化・家・界」の12個の、計24個である。これらは日韓両言語の接辞全体の使用実体が把握できるようにするため、第1に、接辞の性格が偏っていないさまざまな種類のもの、第2に使用頻度が高いものから低いものまでさまざまなもの、そして第3に日韓両言語に共通のもの、を選択した。分析の結果、日本語と韓国語の接辞添加のパターンは、部分的には異なっているものの、全体的には大変類似していることが明らかになった。このことから、日本語と韓国語の接辞を外国語として学習する場合には、母語の知識がある程度応用できると考えられる。一方、語基別に見た場合には両者の結合パターンは異なっていたが、これは接頭辞の使われ方が日本と韓国語で異なっているためであると考えられる。以上のことから、韓国語母語話者が日本語の接辞を学習する際には、両言語で接辞添加パターンが異なっているものに焦点を当てることで、効率的に接辞を習得できると思われる。

■ 미야오카 야요이(宮岡弥生)

広島経済大学助教授  
731-0192 広島県広島市安佐南区祇園5-3-7-1  
広島経済大学  
082-871-1068  
y.miya8411@hue.ac.jp

■ 타마오카 가츠오(玉岡賀津雄)

広島大学教授  
739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1  
広島大学留学生センター  
0824-24-6288  
ktamaoka@hiroshima-u.ac.jp

■ 임현정(林炫情)

広島修道大学助教授  
731-3195 広島県広島市安佐南区大塚東1-1-1  
広島修道大学  
082-830-1254  
hylim@shudo-u.ac.jp

- 투 고 일: 2006년 6월 15일
- 심사개시: 2006년 6월 25일
- 심사완료: 2006년 8월 4일